

だいかく

大桮遺跡の発掘調査

トピック さまざまな人形達！！

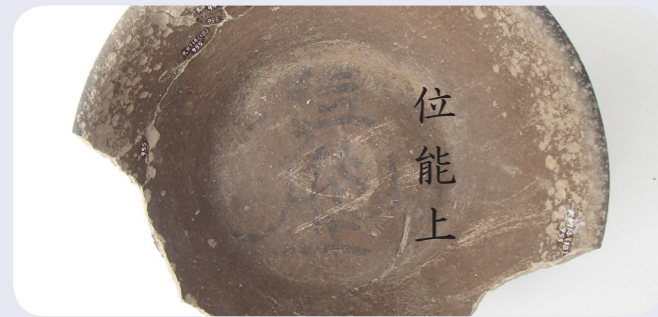
人形とはおもに奈良・平安時代（約 1200～1300 年前）の祭祀（マツリ）に用いられた道具のひとつで、宮殿や官衙（＝役所）などからよく出土することで知られています。

こうした人形は、手足や頭、顔などを木の板に表現して人間の容姿を象り、穢れを人形に移して水に流していたと考えられています。現在でも鳥取市用瀬町で行われている「流しびな」が似たような風習といえるでしょう。

大桮遺跡では、古代の川からたくさんの人形がみつかりました。頭部の形は大きく 2 種類あり、そこに描かれた表情はさまざまで、長さ 1 m を超える大きなものもあるなどバラエティ豊かです。もしかすると、人形は穢れを祓う人に似せて作られていたのかもしれませんが、川の水辺で、想いを乗せたさまざまな人形達が何体も流れていった光景が目に浮かぶようです。



トピック 器にかかっているのは…



遺跡から文字が書かれた資料が出土するのは珍しく、文字から当時の人々の生活の一面を考えることが出来るのでとても貴重です。なかでも、墨で土器に文字を書いたものを「墨書土器」とよび、地名や施設名、吉祥句（おめでたい言葉）などさまざまなものが書かれています。

川から出土した墨書土器のなかに、内・外面に「位能上」（位能く上がれ？）と書かれていたものがあります。吉祥句のように考えられますが、これを書いた人は自らの出世を祈願していたのでしょうか。

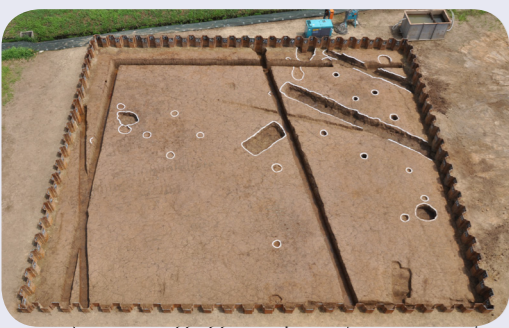
トピック 古代の貴重品



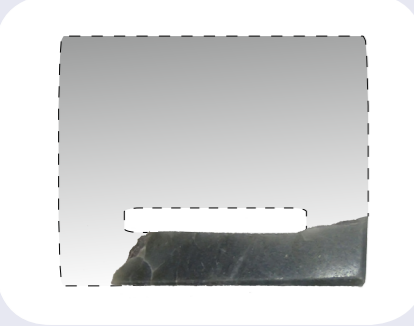
みなさんは古代に使われていたお金をご存知でしょうか。大桮遺跡からは昔使われていた銭貨（お金）が 2 種類出土しています。ひとつは「和同開珎」（写真左）で、和銅元年（708 年）に初めて発行されました。日本で最初に広く流通した銭貨として有名であるためご存知の方も多いと思います。もうひとつは「承和昌寶」（写真右）で、承和 2 年（835 年）に初めて発行されたものです。

これら銭貨は発行された正確な年代が古文書から判明しているため、遺跡の時期を考えるうえで貴重な資料となります。





弥生時代の布掘建物
 3区でみつかった弥生時代の建物です。建物の柱を据えるための溝が並行して掘られています。長さ9.5m以上、幅4.0mの大きな建物があったことがわかりました。

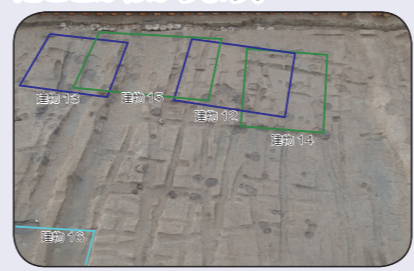


建物そばの貴重品
 2区でみつかった石帯というベルトの飾りです。飾りには丸いもの（丸鞆）と四角いもの（巡方）の二種類がありますが、これは後者の巡方の破片です。当時の役人など、一定の立場にある人がつける飾りであることから、建物群に住んでいた人の身分や職位を考える上で重要なものといえます。

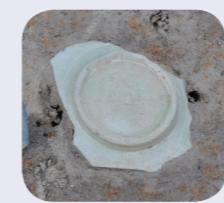
- 文字瓦出土地点
- 墨書土器出土地点
- 緑釉陶器出土地
- 見学ポイント



北側の建物群
 11棟以上の掘立柱建物がみつかりました。側柱建物と総柱建物の2種類の建物があります。重複する柱があるため、2時期以上にわたって建物群が営まれていたことがわかります。



南側の建物群
 6棟以上の掘立柱建物がみつかりました。地面に縦横無尽にはしる凹凸は、後の時代の耕作の跡です。



建物そばの貴重品
 建物のそばからは、普通の集落ではお目にかかれない貴重な遺物がみつかりました。左の写真は緑釉陶器という器です。当時(平安時代前半)の貴重品で、拠点的な集落でみつかるかとされています。右の写真のような文字が残る瓦もみつかりました。



川の中の遺物1
 平安時代の編み物がみつかりました。全体の形は不明ですが、とても精巧に編み込まれている様子がわかります。



川の中の遺物2
 穢れを祓ったり、結界とするなどのまじないに使ったとみられる人形や齋串がみつかりました。中には1.4m近い大きな人形も。大きい！！

大柵遺跡とは・・・

公益財団法人鳥取県教育文化財団では、一般国道9号（鳥取西道路）の改築工事に先立ち、今年5月から大柵遺跡（鳥取市大柵）の発掘調査を行っています。

野坂川中下流域に位置する大柵遺跡は、過去の調査から縄文時代の終わりごろから人々の活動の舞台となり、弥生時代～古墳時代には大きな集落が営まれていたことが分かっています。遺跡周辺の丘陵は、鳥取平野最大規模の前方後円墳である柵間1号墳をはじめ、古墳の密集地であり、特に古墳時代の集落はこれらの古墳との関わりがあるかもしれません。

また千代川西側の地域は、奈良時代に「高庭荘」として東大寺（奈良）の所有地（＝荘園）となったことを契機として、開発がすすめられたといわれています。今回の調査では、奈良～平安時代の遺物・遺構が多数みつかり、古代における当地域の実態にせまるものと期待されます。

発掘調査でわかったこと

今回の調査では、平安時代前半の建物群と祭祀が行われた川（1-1区）や弥生～古墳時代のムラ（2・3区）を確認しました。今回は主に1-1区の成果についてご紹介します。

調査区の西側には、17棟以上の掘立柱建物からなる建物群がひろがっています。建物は3～4回程度の建て替えが行われていたようなので、比較的長い間、建物群が営まれていたことがわかります。なお、建物の周辺からは、文字瓦、和同開珎や承和昌寶といった銭貨（お金）、緑釉陶器など、当時の有力者の存在を示す遺物がみつかりました。

一方、調査区の東側には、蛇行して北側に流れる川があります。川の中からは、墨書土器や転用硯のほか、古代の宮殿や官衙（＝役所）などでよくみられる水辺の祭祀に使う人形や齋串などの木製の祭祀具がみつかりました。これらの成果から、今回確認した建物群は、古代の役所関連施設または有力者の住まいであったと考えることができそうです。